



京都国立近代美術館 友の会会報

2005
SUMMER
第5号



小林古径 「竹取物語」のうち「不登山」 大正6年（1917年）

展覧会の

見どころ

小林古徑展

7月26日〔火〕—9月4日〔日〕

休館：毎月曜日

毎週金曜日および8月16日(火)の大文字・五山の送り火の日は
夜間開館(午後8時まで。但し入館は午後7時30分まで)

四条河原納涼—小林古徑「河風」(1915 年作)について

夏と秋と行きかふ夜半の波の音

かたへすずしき鴨の河風 後鳥羽院

今年も京都に暑い夏が来た。地球温暖化のいわれる昨今ほどではないにしても、盆地の京の夏は、昔から暑かっただろう。鴨川の四条河原の夕涼みが夏の風物を表す言葉として残っているのも、京都ならではのことである。



河風 大正4年(1915年)
山種美術館所蔵

夏越の神事と関係があることが解る。

さて、祇園会を神事といえばいかめしいが、必ず歌舞音曲が伴うのも神事の常であろう。祇園会のような

大きな祭では、日本全国から多くの芸人が集まってきて、この河原で自分たちの芸を披露し、神々を慰めた。鉦町といわれる四条烏丸周辺からは、1キロ弱程の距離であるが、祇園会はあくまで、牛頭天王を祀る祇園社が祭の本体、そのことへの崇敬と祀り、賑わいは、今では想像ができないほど盛んなものであったようである。

「河風」は大正4年(1915)、小林古徑三十二歳の作品である。かすかに初期風俗画の面影を宿している。江戸風の粋も感じられるが、「四条河原納涼」が、その匿されたテーマであるに相違ない。夏衣装の若い女は、垂髪をおおらかに結んで、桃山末から江戸初期の遊女図を思わせ、手にする秋草模様の団扇は琳派風で、とてもみやびやかだ。江戸や大坂では、河は大河で水量も舟遊びに向き、床几を置く浅瀬はなさそうだ。

大正時代のはじめ頃は、特に若い日本画家たちの間で、次々と紹介される西洋美術への関心が高まり、同時に、日本の初期風俗画や浮世絵の再評価も熱心に行われて、旧態然とした画壇に対する不満や批判がくすぶっていた。古徑たちの研究グループ、「紅児会」の親分的存在であった今村紫紅なども、「とにかく俺はぶっ壊すから、後は君たちが建設してくれ。」と語っていたし、土田麦僊なども、文展(文部省美術展覧会)への出品作の全体的なレベルの低さを嘆く言葉をしばしば落としていた。こうした中での若者たちの革新的な日本画の動きは、非難を浴びる一方で、多くの支持者も得た。この作品と同じ年の第2回再興日本美術院展に出品された、古徑の「阿弥陀堂」は、宇治・平等院阿弥陀堂の夜景を画いた作品であったが、非常に好評を得た。この「河風」について言えば、今村紫紅の強烈な個性の影響が、未だ圧倒的に強い世界である。しかし、生涯の中で意外に多く画かれた古徑の女性像の嚆矢として、品の良い独特の官能性がすでに、ほの見えて興味深い。

(加藤類子)

美
心
短
信

MIHOミュージアムと信楽・ 陶芸の森を訪ねて

友の会では、去る6月12日の日曜日、滋賀県のMIHOミュージアムと「陶芸の森」陶芸館を見学する、日帰りのバス・ツアーを行いました。丁度前日に近畿地方には梅雨入り宣言が出て、土曜日は終日降り続いていたので、雨の見学になると、半ばあきらめていたのに、朝から晴れて、気温も辛抱できる程度、よいツアー日和となりました。参加者は、20名とやや少な目でしたが、ゆっくりとバスが利用出来る、思わぬメリットもありました。

さて、はじめての訪問者の多かったMIHOミュージアムでは、「聖なるものの造形」展が最終日の賑わいを見せていましたが、担当の学芸員の方が、会員たちに実に懇切なギャラリー・トークをしてくださり、世界の、主に古代の文明の遺産である美術品の、壮大かつ難解の世界を、解りやすく解説してくださり、一同充実のひとつきを過ごしました。昼の食事も、同美術館付属のレストランでいただき、米、小麦、果物、紅茶、コーヒー、日本茶、調味料など、殆どが無肥料、無農薬で作られた物のみを使っているとの説明を受けました。精進風の素朴な味わいが印象的でした。

ここから数キロ、バスを走らせると、やがて信楽盆地。その北側の丘陵に、大きな面積を誇るのが「陶



「陶芸の森」陶芸館の前での記念撮影



MIHO美術館ロビーで説明を聴く会員たち



「陶芸の森」陶芸館での列品解説

芸の森」です。どんだん丘を登り、一番見晴らしのよい場所に建つのが陶芸館です。ここで、北欧の日用食器を紹介する展覧会、「北欧のスタイリッシュ・デザイン—フィンランドのアラビア窯」を見学、これも最終日でたくさんの若い見学者が熱心に鑑賞していました。館に入場する前に記念撮影をしました。館内では、副館長と学芸員のお二人が、ずっと付き添ってくださり、親切に解説やコメントをいただきました。アラビア窯の製品は、1970年代頃から、日本でも百貨店などの食器売場に登場し、やや高値ながら、その独特の朴訥で、しかも清潔なデザインが愛され、沢山の愛好者を獲得しました。その頃購入したコップや小皿が、未だに水屋の隅っこや、食器棚のどこかに眠っているではありませんか。ふと、そんな懐かしさを覚えました。

京都までは、混んでいても2時間程度。ゆっくりと、未だ陽の高い頃に無事帰着することができました。友の会のツアーは、1983年以来、約20年ぶりの再開ですが、まだいろいろと、至らぬところがあるかと思えます。次の機会にも、是非ご参加ください。

(友の会事務局長)

『静物』の表現世界
7月20日(水)―9月4日(日)

4月からはじまったコレクション・ギャラリーの小企画展も4回目を迎えますが、今回は「小林古径展」(7月26日―9月4日)に連動して、日本画だけではなく、洋画や版画作品なども含めたコレクションから「静物」の表現世界を探ります。

よく知られているように、16・17世紀のヨーロッパでは、死んだ鳥や魚だけが画かれて、それが草花や果実と並んで、いわゆる「静物画」の源流といわれ、事実フランス語では、「静物画」は“nature morte”(死せる自然)と表記されています。しかし、こと日本画の世界では、「花鳥風月」とも呼ばれるように、生命をもつ美しい花や鳥が、「日本画の静物」の対象でありつづけているのではないのでしょうか。一方、日本の「洋画」では、有名な高橋由一の<鮭>(東京芸術大学蔵)や小出楯重の<卓上静物>に見られる、ややグロテスクな魚のように、西欧の油彩表現と響きあう感性も認められます。

古径は、<菓子>や<瓶花><三宝柑>など、とりわけ小品



小出楯重 卓上静物 1928年

の「静物」に、日本画特有の表現世界を開拓しましたが、今回は、この「静物」というひとつのジャンルをとおして、日本画や洋画など、その表現意識の相違についても思いをはせていただきたいものです。

(山野英嗣)

友の会の催し

芸大生によるサマー・ナイト コンサート

友の会では、今年から、京都市立芸術大学と共催で、同音楽学部に通う学生によるコンサートを開くことになりました。年間3、4回、当館1階ロビーで、展覧会終了後の夕刻のひとときを愉しんでいただきたいと思います。第一回は7月31日(日)午後6時から、次の曲目を演奏する予定です。

メンデルスゾーン：「弦楽8重奏曲 op.20 変ホ長調」

「劇音楽<真夏の夜の夢>より序曲作品21

ドビュッシー：「ベルガマスク組曲より 月の光」

ラヴェル：「序奏とアレグロ」

ムスログスキー：<展覧会の絵>より抜粋：「プロムナード」

「古城」「鶏の足の上に建っている小屋(パ

バ・ヤガーの小屋)」「キエフの大門」など。

定員は100名。入場は無料です。雨天でも行います。

なお、7月以降の予定は次の通りです。

平成17年(2005)10月15日(土)午後6時開演

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第9番作品59-3「ラズモフスキー3番」

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲op96「アメリカ」へ長調ほか

平成17年(2005)12月17日(土)午後6時開演

ヴィヴァルディー：合奏協奏曲集「四季」より「冬」「春」

バッハ：クリスマス・オラトリオより

バッハ、グノー、シューベルトほか：「アヴェ・マリア」

いずれも定員は100名。入場は無料です。雨天でも行います。

友の会会員の方は席を予約できます。ハガキに住所、氏名、お電話番号、同伴者数を書いて、開催日の3日前までに友の会事務局(京都国立近代美術館内)まで。

- 開館時間
午前9時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)
- 夜間開館
4月15日(金)―9月2日(金)までの企画展開催中の金曜日
午前9時30分～午後8時まで(入館は午後7時30分まで)
- 休館日
毎週月曜日(月曜日が休日に当たる場合は、翌日が休館)、及び年末年始
(開館時間、休館日は臨時に変更する場合があります)

※お車でお越しの場合 岡崎公園駐車場(地下)をご利用の有料入館者は、駐車場の割引(1台1名)を受けられますので、駐車券をお持ちの上お越しください。

交通案内



独立行政法人国立美術館

京都国立近代美術館

The National Museum of Modern Art, Kyoto

〒606-8344 京都市左京区岡崎円勝寺町
TEL. 075-761-4111

テレホンサービス 075-761-9900
ホームページ <http://www.momak.go.jp>